

人 84 骨髓バンク設立に向け活動

小師 美沙子さん
山田上第二・五十五歳

「とにかく、骨髓移植、骨髓バンクというものについて、たくさんの人から理解を得てもらいたいです」と小師さんは言う。

日本で、白血病などで骨髓移植を必要とする患者は、年間二千人いるそうだ。骨髓移植とは、白血球の血液型であるHLAが一致する人の骨髓細胞を患者に移植するというもの。もちろん100%確実に治るということではないが、それ以上に問題なのがHLAが一致する人を見つけることが難しいこと。兄弟で四人に一人、他人では五百人から一人に一人の確率でしか一致しないという。実際非血縁者の移植はこれまで数えるほどしかない。

そこで、あらかじめ骨髓を提供してくれる人を登録し、移植を待つ患者に対応するというのが骨髓バンクである。

骨髓バンクを設立しようという動きが全国で始まっていて、新潟では新潟骨髓バンク推進連絡会議という組織ができた。ちなみに、国は設置に向け動きだしたが、民間では東海、九州、北海道と三つのバンクができてきているというのが現状だ。

その代表である金子和子さん(吉田町在住)と高校時代の友人という関係で、小師さんはこの運動にかかわることになった。「昨年の春からですから、一年と

ちょっとですか。その間、骨髓移植とか骨髓バンクについて勉強させてもらいました」と小師さん。

最近では聖籠町の熊倉瑞穂くんとHLAが一致する人を探す運動が記憶に新しい。探し出せないうちに母子心中といういたましい結果となったが、骨髓バ

ンクができ、数多くの登録者がいれば救えたのかもしれない。

骨髓バンクは必要という気運は高まってきたが「骨髓移植について誤解があるようなんですよ」と小師さんは嘆く。「骨髓を脊髄と勘違いされるかたが多くて… 骨髓移植では全身麻酔して、



小師さん。手にしているのは骨髓バンクについて知らせるポスター。背後に積んでるのは寄贈いただいた古着など。5月下旬の海浜公園でのフリーマーケットは悪天候のため参加しなかった。8月2日から4日までのBSN夏まつりに出店する。売上げは骨髓移植や骨髓バンクについて広く知らせるための活動(パンフレットなどの印刷、発送など)に使われる。骨髓バンクなどに関心のあるかたは☎377-2393までご連絡を。

腰の骨盤から骨髓液を取り出し、それを患者さんに点滴で移植するんです。手術後、二、三日腰が痛むくらいで、それほど危険ではないのですが」。

もし、日本の骨髓バンクに五万人の登録者があれば、約七〇〜八〇%の患者にHLAの適合する人が見つかるかと計算されているそうだ。「今こうしている時も、骨髓移植が受けられないまま失われていく命があります。骨髓バンクはこうした人たちの命の翼です」と小師さん。

さて、この運動にかかわって小師さんは「ほかにも手話などいろんなボランティア活動をやっていて、たくさん人の若い人が一生懸命やっているのを知ったこと」がよかったという。

なお、県内で骨髓登録ができるのは、新潟市古町の献血ルームと新潟市西保健所となりの県赤十字血液センター。成分献血をするときに申し出ればできる(もちろん無料)。

ほんの一冊

「夏への扉」
ロバート・A・ハインライン作
福島正実訳(早川文庫)



SF界の巨匠ハインラインが1957年に描いた近未来小説である。優秀な技術者のダンは1970年の

12月、恋人に騙され親友に裏切られ自分の発明も取り上げられて、自暴自棄の状態で冷凍睡眠の保険会社と30年の契約をしてしまう。30年後に目覚めた時、自分が申請したはずのない製品が自分の名前で実用化されるなど数々の謎が浮かび上がり、その真相をつきとめるために手を尽くすのだが、主人公が八方ふさがりの状態からすてうまく事をなし遂げるまで、謎解きの面白さで一気に読まされてしまう、お薦めの一冊です。

(紹介者 中山 佳奈恵)

〈人の動き〉			
	6月末日現在	(前月比)	前年同日比
人口	23,708	(+12)	[+300]
男	11,628	(+13)	[+158]
女	12,080	(-1)	[+142]
世帯	6,405	(+1)	[+140]
6月1日～末日			
出生	27	転入	52
婚姻	6	転出	52
死亡	14		



●今月号の表紙

「治療文化論」(中井久夫著、岩波同時代ライブラリー30)という本を読んでいたら、こんな箇所があった。「インドネシア人の清潔親和性は疑わなくとも、勤勉、几帳面を疑う在留邦人は多い。しかし、午前九時から一時か間の昼休みで五時までの労働をもとめているのが日本の企業である。これは熱帯で一生を送ることはできない(早世する)」。

働くために生きるのか、生きるために働くのか。ソクラテスが「ひとは食べるために生きていて、わたしは生きるために食べている」とか言ったという話を思い出した。過労死などということばでは無縁でいたいものだ。

●来月号の表紙

先月号で「大きく変わりつつあるまちの姿についてお知らせしたい」と書きました。準備が間に合わなかったため、一か月遅れでやります。皆さんのご意見やお考えをお聞かせください。▼連絡先：役場企画商工課 広報係(☎三七七七一・三〇一内線三三六)

